さくらに、いかり

小松澄子（新高根・60歳）

「今の若者たちは、シベリヤ抑留のことなど、ほとんど知りません」と関西わだつみ会世話人の方が言っておられましたが、もう何年も前の新聞に淡谷のり子さんが、「近頃の若者を見ていると横面をなぐりたくなります。戦争中、慰問で歌を唄っている時に、十六才位の少年兵が出撃の時が来ると、挙手の礼をして次々と戦場に向って行く後姿を見て、唄っている時に涙を見せた事のない私でしたが、この時は涙が流れてしかたがなかった」と書いてありました。

時は移り、人の心も変わりましたが、平和と言う事をしみじみかみしめたいと思います。現在の十六才と私達の十六才とでは、生活面・精神面で大変なちがいがあると思います。「負ける」と言う言葉を教えられなかったあの時代は、「ほしがりません。勝つまでは」の標語のもと、何事も我慢し、その日その日を精一杯過したものでした。

学校が新宿にありましたので毎月八日の大詔奉戴日には、紺色の制服の女子学生が玉砂利を踏みしめて明治神宮へ必勝祈願に参拝しました。その姿は清らかでした。

「国旗」の題で奉納しました「歌」があります。いつも仲良しだった友の歌

「香港に東亜の光りあびながら
今ひるがえる　日の丸の旗」　上

私の歌

「今朝も又　勤労の人通り行く
胸にかがやく　日の丸の旗」　上

一枚づつ半紙に書いて形見として交換し、救急袋の中に家族の写真とともに入れいつも行動を共にしましたが、今だして見ると半紙も黄ばみ、折目もうすく破れそうですが、墨の香だけはかすかに残っております。

だんだん戦争が悪化し、学徒壮行会・山本元師の国葬・アッツ島玉砕のラジオのニュースに銃後を守る女学生は、なぎなたの練習から竹やりの訓練にはげみ、へちま衿の学生服から活動着というもんぺ姿になり、防空頭布と救急袋をさげ、足元はいつも下駄でした。あの頃も今に負けない満員電車で、男の人の軍靴に踏まれる痛さは忘れられません。母のつむぎの着物をほどいて縫った上下お揃いの活動着は一番のおしゃれ着でした。又、私は着物や帯の残り布で、新聞紙と麻ひもを芯にして下駄の鼻緒を作るのが上手でした。空襲のない夜は、黒い布のかぶった電球の下でせっせと作り、戦災にあった友人にプレゼントしてとても喜ばれました。戦局ますます重大となり、一機でも一艦でも多く第一戦に送れという声に、大崎にある明電舎に学徒勤労動員として働く事になりました。国防色の作業衣、左

腕に「報国隊」と書いた布を縫いつけ、工員さんの間に入って初めて見る飛行機の小さい部品作りでした。教科書を開く事がなくなって、来る日も来る日も空襲。六角型の筒の焼夷弾が、ローソクに火をつけたように高い空から落ちて来て、必死に火はたきやぬれござで消しました。空襲解除の後に庭を見ると、木々の枝に錫の様な細長いひもがあちらこちらにひっかかって、月の光にキラキラゆれておりました。横浜の工場が爆撃された時も空一面灰と一緒に光る粉が舞い上り、ゆっくり風にのって落ちるのを見て不安がつのりました。

小学生だった二人の弟達は、学童集団疎開で寒い新潟のお寺に行きました。出発の前の日、母が短い髪の毛と爪を半紙に包んで大切に引き出しにしまい、時折開いて見ていました。もう熟年になった弟達は、この時の母の思いは知らないと思います。

その頃の女学生の宝物、それは「桜にいかり」の予科練生の七つボタンでした。道すがら、予科練の生徒とすれちがう時は胸がたかなりました。友人が一個持っていたボタンをとてもうらやましく思ったものです。「江田島」の本に夢中になり、まわし読みをしました。防空壕の中では「菩提樹」「早春賦」「同期の桜」など心の中で唄っていました。

三月十日の大空襲で電車が不通となっても、休むという事を知らない私共は、朝早く家を出て線路の上を歩いた。皆、黙々と中川・荒川の鉄橋の上を歩きました。下を見ると水はとうとうと流れ、吸い込まれそう。立ち止まると後の人に迷惑がかかるので、「一、二、一、二、」と必死にまくら木をまたぐ。友は渡れないと泣き出した。這っていったら行かれるかしらと四つばいになってまくら木をつかんだとたん、胸のポケットから定期入れがするりと落ちて川のふちの葦にひっかかり、見えているのにどうすることもできず「家の人にすまない」とすすり泣きました。いま総武線で通る度、自然と目が川の上に行き、あの時のことを思い出します。隅田川を渡る時、ふと見ると、焼けこげの木材と一緒に女の人の土佐衛門が浮いています。パンパンにふくらんだ縞のもんぺの両足が今でも目にやきついております。その時は、空襲で亡くなったのね私もこうなるのかな、と思うだけでした。雨の降っている川岸には、暗くなると燐が燃え、青い炎がゆれていました。人を焼く煙とにおいがただよっていました。

勉強・読書・裁縫・料理と何にもできなくなって、私共の得意とする作業は穴ほり、料理は「いため物」でした。カミソリで小指を切りハンカチに「必勝」と書き、空襲・空腹で終戦になりました。あの八月十五日、それは、明電舎の食堂で放送を聞きました。雑音ばかりで何もわからず、前の方で聞いていた工員さんがテーブルや椅子をけとばしているので、何事がおきたのかしらと思い各自の場所にもどって始めて先生より敗戦を聞かされました。涙も出ず、うつろな目で飛行機の部品の赤や黄色・黒色の色彩を見つめていましたが、「今夜から空襲がないのだ」「明日から何をするのだろう」色々な事が頭の中を走り去りました。

帰りの電車の運転手さんの乱暴だったこと。無言で窓の外の焼跡を見ていましたが、ふと友の三つあみにあんだおさげ髪に黒い毛じらみがのそのそ出てきては又入って行きました。当時はみんなしらみがいました。友は父親の戦死の公報を数カ月前に受け取り、二度戦災にあって穴を掘っての壕舎生活でした。今、何を考えているのでしょう。

戦争の時は色々とむずかしい言葉を使っておりましたが皆忘れかけております。戦争とは、その裏の裏に悲しい事・あわれな事が沢山ひそんでいます。もう七年も前になりますが、友人と清澄庭園に行く途中、ここに川

があったであろう所に白木の「三十七回忌戦没者の塔」がありました。野菊の花と小さいお皿にきれいな水が入っていました。上は高速道路で色々な車が走り去ります。当時、どんな思いで逃げまわりここまで来たのかなと高木敏子さんの「ガラスのうさぎ」を思い出し、いつしか二人とも塔をなで、黙禱をしておりました。

